

中国——社会と文化
第二十三号（二〇〇八年七月）
抜刷

中国出土資料研究の現在と展望

谷 中 信 一

中国出土資料研究の現在と展望

谷 中 信 一

はじめに

過去百年間の中国古代(史)研究は三つの大きな山を迎えたということが、よく言われる。

その第一は、河南省安陽県の殷墟から大量に出土した甲骨文資料。尤もこれははじめ竜骨と称されて漢方薬の材料とされていたというから面白い。これがかけがえのない歴史資料(史)料であることが判明してから解読が始まり、以来、殷周史に新しい知見を次々と提供し、ここに「甲骨学」という新たな学問分野が生まれたことは周知の通りである。『史記』などの伝世文献と出土資料を照合して事実を解明するという王國維のいわゆる二重証法はこのときに提唱された。この方法論が、出土資料学隆盛の今、しばしば話題に上る。

第二は、甘肅省敦煌莫高窟から大量に出土した典籍群である。儒仏道の各分野の重要文献が大量に発見されたのであるから、これまでの中国宗教史、思想史等に絶大な貢献をしたことは周知のことである。但し、この敦煌文献発見当時、中国は半植民地状態にあり、中国政府はこれらの管理保存に

全く打つ手が無く、諸外国の探検家に蹂躪されるままであった。こうして敦煌文献は、フランス人ペリオ、イギリス人スタインらによって国外に持ち去られ、今でも英仏兩國の他、ロシアにも所蔵され、日本にも僅かではあるが所蔵されて、今日に至っている。こうして生まれたのが「敦煌学」であり、これは全世界の研究者を巻き込んで一世を風靡した。

第三が、今日の出土資料学に直接連結する簡帛類の発見である。そのピークは、文革のさなかの一九七二年山東省臨沂県銀雀山漢墓出土の竹簡群。明くる一九七三年河南省長沙市馬王堆三号漢墓出土の竹簡帛書群である。この相繼ぐ二大発見により、これまでも断片的に発掘されていた出土資料が一躍学界の注目するところとなり、とりわけ中国古代思想史研究者らにとって未曾有の新発見として関心をさらった。その後しばらくの間、「馬王堆学」は活況を呈したが、やがてブームも去り下火になった。ところが一九九〇年代、湖北省荊門市の郭店戦国楚墓から新たに竹簡群(以下、郭店楚簡と略称する)が発掘され、また盗掘されたために発掘地点は特定できないが、郭店楚墓とほぼ同一地点同一年代の楚墓から

発掘されたと考えられている「上海博物館蔵戦国楚竹書」(以下、上海博楚簡と略称する)が二千数百年の眠りから覚めて、文字通り日の目を見ることとなった。ここに馬王堆漢墓帛書発見以来のブームの再来、龐樸氏の言を借りれば「炒冷飯」の状況が現出した。またこれと相前後して、湖南省長沙市中心部イトーヨーカ堂ビルの建設工事現場の地中から、

おびただしい量の木簡が発見された。これは、「三國呉簡」と名付けられ、当時の行政システムを知るうえで第一級の史料とされ、中国の國家文物局の出土文献與考古文物研究中心のメンバーを中心に釈読作業が進められ、この写真版と積文が公開された。こちらの方は、思想史研究に資する所は大きくないようである。(1)

このように、一九七〇年代以来の三〇有余年間に発掘された新出土資料は、中国のみならず世界の中国古代研究者が等しく注目するところとなり、次々と研究成果が発表されていくこととなった。こうした新出土資料に基づく研究、これを「出土資料学」と称することができよう。ところで、この第三の山が、これまでの二つの山と違うのは、甲骨文にせよ、敦煌文献にせよ、出土地は特定されており、しかも今後の新出土は殆ど期待できないのに対して、こちらの方は今後も新たな出土が期待できるということである。ここに、「出土資料学」が現存の出土資料を扱うに止まらず、今後も発見される可能性のある資料を扱おうという意味で、将来にわたってその期待は高いと言わねばならない。それゆえに出土資料学を一過性の流行に終わらせてはならず、今後の新発見を期

待する一方で、現存の出土資料について精密かつ着実な研究を積み重ねていかなければならない。

さて、このようにわずかに百年余の間に中国古代研究は分野こそ違え三度のピークを迎えつつ今日まで発展を続けてきたのであるが、古代思想史研究に限って言えば第三の山がとりわけ重要であろう。これは私だけの感想かも知れないが、思想史研究に必要な伝世文献だけでも、その注釈書等を含めれば、一人の研究者の手に余るほど大量にある一方で、その伝世文献による研究だけではもはや新味ある成果は期し難いと思いがあふ。まさにこのような時期に、このような大発見であるから、研究に熱が入るのは当然である。

このような趨勢の中、一九九五年に池田知久東京大学教授(当時)の呼びかけにより発足したのが「中国出土資料研究会」であった。国内外から会員を募り会員数も着実に増加して、その二年後には「中国出土資料学会」と改称して、日本学術会議の登録学会となり、今日に至っている。この「中国出土資料学会」は「中国出土資料研究」と題する機関誌を毎年一回、「中国出土資料学会会報」を三回それぞれ発行している。(2)

ところで一般に新出土資料というものは、古代中国をフィールドとしているわれわれだけではなく、古代ローマ帝国史を研究する者にとっても甚だ重要であるらしい。つまり従来の伝世文献は、少なからずキリスト教のバイアスがかかっていて必ずしも正確なローマ帝国史を描き切れなかった。ところが近年の考古学の発達によってヨーロッパ・北ア

フリカ各地の遺跡から発掘されたローマ時代の出土資料によって、ローマ帝国史研究に新たな地平が開かれたと聞く。

一 中国出土資料学の現況

「出土資料学」は、本来領域横断的性格を持つ学問分野であり、その扱う対象も広範なのであるが、小稿では筆者が特に関心を寄せる思想史研究の領域に限定して述べることをお許し頂きたい。

先ず中国における研究の現況から概観しておこう。敦煌文献の場合と違い、出土資料原件はすべて中国で保管され、先ず彼らの手によって基本的な研究がなされ、その後に関外の研究者に公開される。そういう意味では、彼らに研究の優先権があるといつてよい。

出土資料を最初手にするのは、発掘作業に従事した考古学者たちである。発掘には考古学者が不可欠であり、とりわけ出土文献は、掘り出しただけではただのゴミの固まり同様である。ここが、土器・青銅器・玉器類との大きな違いで、脆くて壊れやすい竹簡・木簡等を保存するための高度の処理技術が求められる。竹簡の場合であれば、互いに圧着してしまっている竹簡の塊を丁寧に一枚ずつ剥ぎ取る。だがその段階では、竹簡表面は真っ黒なままで文字の判読は不可能である。これを化学的に処理して文字を浮かび上がらせねばならない。かくして二千年余の歳月を地中で過ごしていたとは思われないほどの墨痕鮮やかな竹簡として再生する。(3)

次いで、ばらばらになって脈絡もわからない竹簡群を、筆

跡・竹簡の形態（長さや先端の加工方法の違いなど）・内容などに基づいて、幾つかの文献群に分類整理する。その際番号が与えられていけばよいが、そうでない場合もあるから、その場合はこれに適切な名前を与える。たとえば郭店楚簡の「性自命出」や上海博楚簡の「孔子詩論」「恒先」などはその好例である。内容が伝世本と同一かもしくは類似していれば、それに基づいて命名する。郭店楚簡では「老子甲本」・「同乙本」・「同丙本」・「繡衣」(一)「礼記」に同名の篇があり、内容も類似している。(2) 上海博楚簡「材衣」(これも「繡衣」に同じ)などはその例である。なお、郭店楚簡では「性自命出」と名付けられた文献とはほぼ同一のものが上海博楚簡からも見つかり、こちらは「性情論」と命名されている。

こうして命名された出土資料であるが、これを伝世文献を読むときのようにきちんと整理されて錯簡もなく読めるからいえばそうではない。竹簡にはページの書き入れがないから、これらを伝世文献を読むときのように、理路の通った文献となるよう一本一本ばらばらになっている竹簡を順序正しく並べなければならぬ。これを編綴と称している。

ところがこの時、完全な状態を保っている竹簡(これを完簡という)は決して多くなく、その多くは途中で折れていたり、腐って一部が失われていたりしている竹簡(これを残簡とか断簡とかいう)が多い。折れてバラバラになった断簡を元通りにつなぎ合わせて復元する作業が加わる。これを綴合という。

甲骨文字の解説に許慎の「説文」は役に立たなかったと言

われるが、戦国時代の楚文字もそれほどではないにせよ、秦始皇帝による文字統一以前の書体であるから、事情は大同小異である。例えば、郭店楚簡や上海博楚簡などは当然ながら楚文字で書かれているから、これを既存のサンプルを総動員して釈読していく。幸い、楚文字とはいえ漢字の一変形であるから、これらをパーツ単位に分けてしまえば漢字に置き換

えも可能である。これを隷定という。もちろん隷定すること自体が不可能な文字も数は少ないが存在する。いずれにせよ文字学者らの懸命な努力によって少しずつ釈読されていく。この釈読の過程で、書き手の癖や筆勢を洞察することに長けた書法家の貢献も大きい。こうした作業を通じて戦国楚文字に関する知識が蓄積されて、やがて字典類の完成となる。だがその内容は次々更新され、数年前に出版されたものでは、もはや不十分で、釈読に不便をきたすこともあるほどである。

一文字一文字についての釈字はこのようになされるが、文意を取るには釈文の作成が欠かせない。漢字は表意文字であるという常識がここでは全く通用しない。音通による通仮字が大量にあるからである。一説によれば、郭店楚簡中の総文字数のおよそ四割が通仮字であるといわれる。つまり、当時の楚地では漢字が相当程度、表音文字のように機能していたことがわかる。面白いことに、現代の簡体字の発想と全く共通している。

以上の作業をひとまず終えると、竹簡の写真(拡大版)とその釈文・注解が一体となって公刊され、われわれはここに

始めて出土資料と対面を果たすことができる。文物出版社刊『郭店楚墓竹簡』(一九九八年)や上海古籍出版社刊『上海博物館藏戰國楚竹書』(二〇〇一、二〇〇七年)がそれである。こうして全世界の研究者の手元に行き渡り、ここに「出土資料学」が国際規模で展開し、毎年のように関連する国際会議が開催されていく。

「出土資料学」のもう一つの大きな特徴は、先にも触れたようにそれぞれの専門分野を持つ研究者らが領域横断的にアプローチしていることである。文字研究者、音韻研究者、思想史研究者、歴史研究者、文学研究者、書法家らが、協力し合ってこれに取り組んでいる。人文学の世界でこれほど共同研究を必要としている分野は稀であろう。

また、これと同様な事情からであるが、情報の共有、交換が不可欠である。この文字をどう読んだか、これら竹簡群をどのように分類し、編綴し、綴合したかということについても不確定要素が大きい。釈文が出版されたからといって、それを鵜呑みにしては研究は進まない。研究者は自己の学識と知見を元に再検討を加え、その上で全体をどのように解釈するか、また思想上どのように位置づけるか、といったことを解明していく。従って研究者同士で情報を常時交換し、問題の所在を常時共有していかなければならない。このために最も効果を発揮しているのがインターネットである。現在、インターネット上に次々と新しい情報が公開され、われわれに提供される。例えば、陳偉教授をリーダーとする武漢大学簡帛研究中心(<http://www.bsm.org.cn>)がある。この

サイトから連日大量の情報が発信される。これと、龐樸教授が北京時代に開設し、今では山東大学教授曹峰氏を中心に運営されている「簡帛研究」(<http://www.jianbo.org/>)がある。現在、出土資料研究に着手しようとするならば、必ず上記二サイトを見なければなるまい。この他にも清華大学が運営している「Confucius2000」(<http://www.confucius2000.com/>)があり、ここでは廖名春教授が「清華大学簡帛研究」欄を担当している。先陣争い・功名争いにも似た活況を呈しているといえようか。

これと並んで「出土資料学」の推進力となっているのは定期的開催される少人数の研究会である。ここでは活発に研究成果が報告され、検討吟味されて、出席者にその成果が共有されていく。卑近な例を挙げれば、池田知久教授が主宰し、筆者も参加している「上海博楚簡研究会」である。本研究会は、二〇〇七年一月までに既に三三三回を数えている。そこでの報告成果を元に論文に仕上げることもあれば、海外の学会に出席してその研究成果を問うこともある。筆者の場合を例に取れば、かつて「魯邦大旱」の訳注を作成して報告し(4)、この研究の過程で生じた疑問をまとめて、二〇〇四年米国のマウントホリヨーク大学で開催された国際シンポジウムで、「上博館(魯邦大旱)的思想及其形成以刑德説為中心」と題して報告した。(5)この報告は、上海博楚簡研究会が無ければ到底なし得なかつたものである。

国内外を問わず「出土資料学」の隆盛を支えているのは、若手研究者の台頭である。とりわけ中国での若手研究者の活躍振りには目を見張るものがある。近年出土資料の発見が相次いだ湖南・湖北両省の大学ではとりわけ熱が入っているようだ。例えば、武漢大学の丁四新副教授は「郭店楚墓竹簡思想研究」で学位を取得し、その高い評価を元に現在では、「楚地簡帛思想研究」の主編として活躍されている。先のウェブサイトにへの投稿論文には青年研究者の手になるものが少なくない。わが国では、東京大学文学部専任講師の李承律氏がいち早く「郭店楚墓竹簡の儒家思想研究」(6)で博士の学位を取得しており、先に紹介した「上海博楚簡研究会」の事務局長を実質的に担当し、大学院生を中心に研究会を継続させている。

この他、「中国哲学」などの名門誌が特集を組むこともある。最近ではこれに加えて出土資料をテーマとする単行本も出てきた。研究の蓄積と拡がりが出てきたからであろう。中国の書店に行くと、出土資料を扱った出版物が多いのに驚く。まさしく「炒飯」である。

第二は、個人の研究者による出土資料を対象とする研究成果の公開で、これは長期に及ぶ出土資料研究の集大成としての意義を持つ。だがこちらはそれほど多くはなく、また出土資料だけを扱うということもない。むしろ、出土資料に加えて、伝世文献を積極的に援用してこれまでになかった研究成果をあげるものである。工藤元男氏の「睡虎地秦簡よりみた

第三は、複数の研究者の出土資料研究論文からなる論文集である。こちらは国際的規模で開催される学会に提出された論文が後日編集出版されることが多い。(9)

また、地道に数年をかけて行われる研究会の成果を一書にまとめることもある。かつて郭店楚簡研究会(谷中信一代表)編の「楚地出土資料と中国古代文化」(汲古書院 二〇〇二年)は、三年間にわたる研究会活動の総仕上げとしての性格を持つ論文集である。湯淺邦弘編「上博楚簡研究」(二〇〇七年)や浅野裕一編「古代思想史と郭店楚簡」(同年)も同様にして得られた研究成果である。

第四グループに属するものに、継続的に行われている大学院での授業や有志による研究会の成果として刊行される論文集もある。国内では管見に入ったものをあげると、池田知久監修・大東文化大学郭店楚簡研究班編「郭店楚簡の研究」(一九九九年)、同氏監修・同大学上海博楚簡研究班編「上海博楚簡の研究」(二〇〇七年)、上海博楚簡研究会編「出土文献と秦楚文化」(二〇〇四年)などがあり、これらは、皆出土資料の精確な読解を目指したもので、今後の研究の進展には不可欠な意義を持っている。海外では廖名春編「清華簡帛研究」第一輯(清華大学思想文化研究所二〇〇〇年)を挙げることができる。

二 中国出土資料学の展望

本節では、今後の中国出土資料学がいかなる方向に発展すべきか、またそのためにはどのような問題を解決していかなければならないか、について意見を述べたい。

1 伝世文献の不備を埋める出土文献

出土文献の学術的価値について、池田知久氏は次のように明快に解説しているので、まずそれを参照しておきたい。(10)

- ① 内容に多少の異同はあるものの同じテキストが現存しており、出土資料はその最古のテキストの一つに当たるという場合。
- ② 同じテキストは既に散佚してしまつて現存していないけれども、『漢書』藝文志に著録されているあるテキストと同定できる可能性のある場合。
- ③ 同じテキストは既に散佚してしまつて現存しておらず、『漢書』藝文志に著録されているどのテキストとも同定できる可能性のない場合。
- ④ の場合は、伝世文献の述作時期やその形成を跡づけるの

に大いに役に立つし、②の場合は、思想史のいわばミッシン グリンクを埋める役割が期待できる。③の場合は、全く未知の世界との出会いを意味し、さらに豊かな思想史の世界を提供してくれる。

結局、どの場合でも、思想史研究の新たな展開を可能にしてくれるわけで、その価値をいくら強調しても強調しすぎることはない。

但し留意すべきこともある。それは、出土文献を珍重するあまり、ややもすると伝世文献の扱いが粗略になりがちなことである。出土文献は、質はともかく量が絶対的に少ないことは言うまでもなく、それゆえ出土文献だけで思想史を紡ぐことはできない。さらに警戒すべきことは、伝世文献のみを拠り所に研究してきた先学の成果に対する目配りが疎かになりやすいことである。先学の成果を越えていかねばならないことは後学たるものの責務ではあるが、いたずらに無視することは避けねばならない。先学の遺産は遺産として継承しなければならぬ。これを怠ると誤った方向に研究が向かいかねないのである。

これを要するに、新出土文献による新たな知見によって、先学の研究成果の再検討、並びに必要なに応じての修正が重要だということであり、それを一足飛びにして、出土資料だけであれこれ論じてはならない。

2 出土地点と出土文献の関係

思想は一つの文化現象である。そうであれば、当然地域的

ことは周知のことである。彼の研究態度は、経書に書かれていることはすべて真実であり、史書に書かれていることはすべて事実である、というこれまでの態度に疑義をさしはさみ、明らかな証拠がない限りは、たとえ経書に記されていることであっても無批判に信用することはできないと主張したため、彼は疑古派と呼ばれた。これと対照的に経書や史書の記載をそのまま受け入れて疑問を持たない研究態度を取る者もあった。これは信古派と呼ばれた。

この間の事情については、すでに金谷治氏が述べておられるので贅言しない。(11)問題はこうした一見果てしのない信古と疑古の論争に、出土資料の発見はどれほどの貢献ができるかということである。(12)

学界の一部では、出土資料の発見によって疑古派の立場は切り崩され、これまで形勢不利であった信古派が息を吹き返して形勢逆転したという雰囲気がある。つまり、出土資料の発見は疑古派に不利にはたらし、信古派に有利にはたらしたと取られやすい。確かに、馬王堆帛書の発見によって現行本『老子』の形成は漢代になってからという説は成り立たなくなったし、新雀山漢簡『晏子』の発見によって、『晏子春秋』が六朝時代に偽作されたという説は成り立たなくなった、ということもあった。つまり、疑古派の主張が崩れた。しかしだからといって『老子』が『史記』老子傳の通り閔令尹喜の求めに応じて道德経上下五千言を記したことにはならないし、『晏子』が晏嬰の自著だということにはならない。にもかかわらず依然として、『史記』の記載通り『老子』五千言

制約を受けることになる。ここに文化圏という考え方が成立する。武内義雄はかつて『中国思想史』の序文で、中国思想史の時代区分を上世期・中世期・近世期に3区分し、春秋戦国時代から漢代までの上世期を「中国に於て中国の民族が案出した思想学説であつて、未だ外来思想の影響を受けていない」ところに特徴があると述べているが、そうしたことが可能であったのは、この時代の中国には複数の文化圏が存在し、それらが互いに交流し合い刺激し合っていたからこそ、次々と新しい思想が生まれることができたことを忘れてはならない。

ところが伝世文献では、こうした思想と地域の関係を十分に解明できなかったのであるが、出土資料は出土地点を特定できることから、出土資料とそれが属する文化圏(郭店楚簡が出土した湖北省荊門市は楚文化圏に属していた。)との関係を念頭に置いて思想史を構想することが可能になったのである。

例えば、上博楚簡「容成氏」「東大王泊旱」という文献は、その内容から見ると楚地において述作されたものであろうといわれる。また、これは反対に「魯邦大旱」は魯国における孔子・子貢・定公の三人が登場していることから見て、齊魯の地で述作されたものが楚地に伝わったとされている。

3 疑古と信古の狭間におかれた出土資料学

顧頡剛が『古史辨』を発刊し、経学的な伝統の枠組みの中で語られてきた中国上古史に対して、鋭い批判の矢を向けた

は老聃によって春秋末に述作されたと言いたがる傾向が根強いのである。

『老子』が孔子の『論語』と並んで中国古代思想史を代表する文献であること、また彼らによって代表される道家と儒家が、それ以後の中国思想史を貫いて流れる二本の大河の如き重要な思想であることに異論はない。だが本当に『老子』はその後の道家思想の源流に位置づけられるべき文献であろうか。

馬王堆漢墓から二種類の『老子』が発掘された。これを甲本・乙本と呼び、抄写年代は、いずれも漢代であるものの甲本がやや古く景帝時の頃、乙本がそれより新しく概ね文帝時の頃、と推測されている。もっともその内容はほぼ同一で、見かけ上の大きな違いは、乙本が「徳」と「道」と篇題を記していることぐらいである。

この発見は、『老子』漢初成立説が成り立たなくなったという意味で画期的であったと同時に、漢初の『老子』は現行本と文の配列が違っていて、前半部(乙本はこれに「徳」と命名している。)は、現行本の第三十八章〜六十六章、第八十章、第八十一章、第六十七章〜七十九章の順で配列されており、後半部(乙本はこれに「道」と命名している。)は、第一章〜三十七章の順で配列されていて、王弼本の道経部分と徳経部分がちょうど前後さかさまに構成されていることが分かった。また、第八十章・第八十一章部分が第六十六章と第六十七章の間に割り込んでいるのは、甲本乙本同一である。(13)この事実を伝世本との比較の上でどのように読み取

るかが問題である。こうしたところに、一九九〇年代に湖南省荆門市の郭店から甲・乙・丙三種の『老子』が発掘された。これに私は「大一生水」を加えようと思う。この「大一生水」は本文を一読すれば明らかかなように道家文献であるが、それ以上に重要なのは、筆跡並びに竹簡の形状が『老子』丙本と全く同じであることから、「大一生水」は丙本から独立させて一篇とするのではなく、丙本と「大一生水」を一体のテキストとして扱うべきだという点である。『老子』甲・乙・丙本が現行本『老子』と共通する内容を持ち、「大一生水」はおよそ現行本『老子』とは異なる内容であることから、丙本から分離され「大一生水」という独立した文献の扱いを受けることとなつてしまつたのであるが、これは今後も検討を要する問題である。(14) しかもこの問題は、郭店『老子』と現行本『老子』との関係をどのように捉えるかということと大いに関係してくる。換言すれば、郭店『老子』を『老子』成立史上においてどのように位置づけるかということである。これには、抄節本説と伝本説がある。抄節本(ダイジェスト本)説とは、『老子』五千言は既にこの時点で存在しており、甲・乙・丙三本はそれぞれある主題に基づいて『老子』テキストから抜粋されたダイジェスト本だということである。つまり、墓主は『老子』全編を所有することなく、ダイジェストされたものを三種所有していたというのである。

これは「史記」老子傳にあるように、「道德経」五千言は春秋末に既に成立していたのであるから、遅くとも戦国時代の『老子』であるというものである。この説でいくと、現行本『老子』はこの時点では未だ成立していなかつたことになる。さらに「大一生水」を丙本の一部分とすると、当時の『老子』は現行本『老子』とはかなり内容が異なつていたことにもなる。

近年の研究によつて明らかになつたことは、どの先秦文献も一時に成立したのではなく、長い時間を経て重層的に積み重ねられて伝世本の体裁を整えるに至つたということである。例えば、「礼記」中の緇衣篇と郭店楚簡の緇衣篇を比較すると、明らかに郭店楚簡の緇衣の方が古樸で、未だ経学的な潤色を施されていない段階の抄写とされている。(15) 現行本『晏子春秋』二〇四章は劉向の編纂によつて完成したと考えられ、その際に利用されたテキストのひとつが銀雀山漢簡『晏子』であつたことが推定できる。

三 今後の課題

1 文字の釈読において

戦国楚文字に限定していえば、通假字での表現が目立つので、漢字を表意文字とのみ見て解釈したのでは、読み誤るおそれがある。さればといって、訓読の困難な文字を、安易に通假字として処理して得手勝手な解釈をしてしまうことの危険性もあり、伝世文献を扱うのとは違つた慎重さが求められる。

2 述作年代について

中期に存在していた郭店『老子』はそのダイジェスト版に相違ないという、先にも紹介した信古的な立場がほとんど論証抜きでこのような見解に導いている。ところがこのダイジェスト版『老子』三種はいずれも、第八十・八十一・六十七・七十九章に相当する部分が全く含まれていない。これらは抜粋するに足りない内容だつたからだというのであろうか。さらにこの立場に立つと、「大一生水」が老子丙本と全く同一の筆跡で同一形状の竹簡に記されていたとしても、これらを一体のテキストとして扱うことは大変不都合になる。そこでこの立場に立つ限り、いわば自動的に「大一生水」と『老子』丙本とは別々に扱わなければならない。現在では『老子』丙本と「大一生水」は全く別個の文献として扱うことが大勢となつていようであるが、まことに承認しがたいことである。

今ここに「大一生水」と書いたのは、竹簡に記されている四文字が「大一生水」だからに他ならないのだが、一般にはこの「大」が「太」に通じること、また漢代以降「太」信仰が広く行われていたことなどにより、「大」をわざわざ「太」に改めて「太一生水」と称している。戦国時代の文献の名称を漢代に流行した事実に基づいて命名したとは本末転倒も甚だしいと言わざるを得ない。

このように抄本説は、ほとんど恣意的と言つても差し支えないほどの先入観を以て郭店『老子』を扱っている。

もうひとつの立場は、傳本説である。つまり抄節本などではなく、甲・乙・丙三本がその当時に説まれていた形成途上中期に存在していた郭店『老子』はそのダイジェスト版に相違ないという、先にも紹介した信古的な立場がほとんど論証抜きでこのような見解に導いている。ところがこのダイジェスト版『老子』三種はいずれも、第八十・八十一・六十七・七十九章に相当する部分が全く含まれていない。これらは抜粋するに足りない内容だつたからだというのであろうか。さらにこの立場に立つと、「大一生水」が老子丙本と全く同一の筆跡で同一形状の竹簡に記されていたとしても、これらを一体のテキストとして扱うことは大変不都合になる。そこでこの立場に立つ限り、いわば自動的に「大一生水」と『老子』丙本とは別々に扱わなければならない。現在では『老子』丙本と「大一生水」は全く別個の文献として扱うことが大勢となつていようであるが、まことに承認しがたいことである。

このように抄本説は、ほとんど恣意的と言つても差し支えないほどの先入観を以て郭店『老子』を扱っている。

もうひとつの立場は、傳本説である。つまり抄節本などではなく、甲・乙・丙三本がその当時に説まれていた形成途上中期に存在していた郭店『老子』はそのダイジェスト版に相違ないという、先にも紹介した信古的な立場がほとんど論証抜きでこのような見解に導いている。ところがこのダイジェスト版『老子』三種はいずれも、第八十・八十一・六十七・七十九章に相当する部分が全く含まれていない。これらは抜粋するに足りない内容だつたからだというのであろうか。さらにこの立場に立つと、「大一生水」が老子丙本と全く同一の筆跡で同一形状の竹簡に記されていたとしても、これらを一体のテキストとして扱うことは大変不都合になる。そこでこの立場に立つ限り、いわば自動的に「大一生水」と『老子』丙本とは別々に扱わなければならない。現在では『老子』丙本と「大一生水」は全く別個の文献として扱うことが大勢となつていようであるが、まことに承認しがたいことである。

このように抄本説は、ほとんど恣意的と言つても差し支えないほどの先入観を以て郭店『老子』を扱っている。

もうひとつの立場は、傳本説である。つまり抄節本などではなく、甲・乙・丙三本がその当時に説まれていた形成途上中期に存在していた郭店『老子』はそのダイジェスト版に相違ないという、先にも紹介した信古的な立場がほとんど論証抜きでこのような見解に導いている。ところがこのダイジェスト版『老子』三種はいずれも、第八十・八十一・六十七・七十九章に相当する部分が全く含まれていない。これらは抜粋するに足りない内容だつたからだというのであろうか。さらにこの立場に立つと、「大一生水」が老子丙本と全く同一の筆跡で同一形状の竹簡に記されていたとしても、これらを一体のテキストとして扱うことは大変不都合になる。そこでこの立場に立つ限り、いわば自動的に「大一生水」と『老子』丙本とは別々に扱わなければならない。現在では『老子』丙本と「大一生水」は全く別個の文献として扱うことが大勢となつていようであるが、まことに承認しがたいことである。

3 綴合ならびに編聯について

現在まで、上海古籍出版社から「戦国楚竹書」として全部で六冊が刊行されている。上述したように、相当慎重に検討を重ねて、書名を与え、綴合・編聯し、釈字・釈文を作成したはずなのに、いったん刊行されると、瞬く間に多くの異論反論が出てしまう。もちろん出土時点では、全てがひとかたまりだつたものを一枚ずつにほぐし、読めるようにしたうえで、一字ずつ隸定し、釈字して、まとまりを与え、書名を与えるのだから、それは完璧ではあり得ず、一つの読みの可能性を提示したに過ぎないのであるから、それは当然といえば当然であらう。

例えば、「上海博物館藏戦国楚竹書(五)」においては、「鮑叔牙与隰朋之諫」と「競建内之」とはそれぞれ別テキスト

トとされて公表されたのだが、直ちにこの「競建内之」は書名ではなく、競建なる人物が、本書を内(納)めたというほどの意味であるとの説が出され、この二つのテキストは実は一体のテキストとして眺むべきであることが、今では定説となっている。このようなことは、例外的に起きることではなく、しばしば起きている。これは池田知久氏分類の③に該当するテキストであるために、伝世本が原型復元の参考に全く使えないからである。

また、竹簡を前に全く途方に暮れてしまうこともある。残簡が多く、簡から簡への文章の繋がりをつけることが全くできず、そのために文意がつかめず断片的な意味しか捉えることができない場合である。上海博楚簡中の「仲弓」¹⁾、昔者君老²⁾と名づけられたテキストがその例である。だが、それらまがりなりにも釈読ができたテキストは、楚文字を集め整理し、字典を作成する場合に大いに役立つ。文字学者にとつては、楚簡が出土すればするほど、文字種を数多く網羅できるだけでなく、書体のバリエーションを多く知ることができるようになり、今後新たな楚簡が見つかったときにも、類似の文字から帰納・類推することにより、釈字作業がより容易になる。

もっともそうした断片的なことしか知り得ないテキストが、思想史研究の一次資料としての程度の価値を發揮しうるかは、今後の研究の進展に委ねなければならぬ。

4 出土地点の偏り

とは大きく違っていたらと思う。その意味では「炒冷飯」などと言ってはられない重要な意義を持つ。今後も一〇年おき位に出土資料が学界に提供されていくならば、ゆっくりではあるが確実に中国古代思想史研究の地平を広げ続けてくれるに違いない。いずれにせよ二千年以上を遡る思想史を扱うのであるからその程度のベースでよいではないか。あらゆる予断を排して、与えられた資料を分析考察し、その成果を次の世代に伝えていけさえすればそれでよいのである。

以上管見に過ぎず、錯誤や遺漏も少なくないと思われる。識者の批正を待ちたい。

(二〇〇八年一月三日稿)

注

- (1) 駢字齋・段書安編著『本世紀以来出土簡帛概述』(万巻楼 二〇〇〇年)は中国出土資料を網羅的に紹介しており、全貌を窺うのに便利である。
- (2) 『中国出土資料研究』は、二〇〇八年一月現在、第一号まで刊行している。同じく『金報』は第三六号まで発行している。
- (3) 二〇〇七年八月北京の国家文物局胡平生氏を訪問した際、文物局では「第四屆出土文獻搶救保護整理研究骨幹培訓班」として、二〇名ほどの若手研究者を対象に一ヶ月間の日程で研修を実施していた。参加者は、文物研究所の新人所員・省級博物館員・考古研

ところでここに一つの大きな問題が残る。それは出土地点の偏りである。山東省の銀雀山から出土した漢墓竹簡を除くと、その多くが湖北・湖南に偏り、この旧楚文化圏、すなわち長江流域なのである。中国全土から平均して出土していれば、先秦地域文化研究に比較対照の立場を取ることで、研究も一気に進むのであるが、現状では旧楚文化圏に属する地域にほぼ限定されているので、他地域の文化圏を研究することの困難さは無論のこと、楚文化の特色を浮かび上がらせることすら容易ではない。こうした偏りは、自然条件の違い、すなわち長江流域の地下水位の高さが埋蔵物の保存に結果的に奏功したと思われる。銀雀山漢墓が乾燥した黄河流域から幸運にも出土したのは例外的に竹簡等の保存に適した地質に埋蔵されていたからに他ならない。

おわりに

出土資料は、これまでの学説上の紛糾を快刀乱麻を断つが如くに処理してくれる特效薬ではない。むしろ、一時的には問題の解決を複雑にしてしまうことすらある。だが、やはりこうした新発見は、旧説に対して修正もしくは再検討を迫るものであることは疑いない。たしかに、これまで膠着状態にあった論争に終止符を打つこともあった。その好例は銀雀山漢墓竹簡の「孫臏兵法」である。これによって、いわゆる孫子として、孫武と孫臏の二人が実在したことが証明されたことは記憶に新しい。また馬王堆帛書「老子」、郭店楚簡「老子」などの発見がなかったならば、先秦道家思想研究は現在

研究所員のほか、台湾大学学生や米国人留学生らであった。

- (4) 上海博楚簡研究會編『出土文獻と秦楚文化』創刊号(二〇〇四年七月)参照。
- (5) 『中国出土資料研究』第九号に、「上博簡「魯邦大早」の思想とその成立―刑徳説を中心に―」と題して発表された。
- (6) 本書は、加筆修正して「郭店楚簡儒教の研究―儒系三篇を中心にして―」と題して二〇〇七年二月汲古書院から出版されている。
- (7) 本書は中国社会科学院の王啓發氏によって翻訳され、線装書局・中国社会科学出版社から二〇〇五年四月に北京で刊行されている。また北京師範大学の李銳氏による書評が先に紹介したウェブサイトで「簡帛研究」に二〇〇七年七月五日付で公開されている。
- (8) 近藤浩之氏書評「馬王堆出土文獻訳注叢書 池田知久著『老子』と野間文史著『春秋事語』」(中国出土資料研究)第一号)参照。
- (9) 例えば、武漢大学中国文化研究院編『郭店楚簡国際学術研討會論文集』(湖北人民出版社 二〇〇〇)、中国社会科学院簡帛研究中心主編李学勤・謝桂華『簡帛研究』二〇〇二～二〇〇三(広西師範大学出版社 二〇〇五)、『簡帛研究叢刊第一輯 第一屆簡帛学術研討會論文集』(中国文化大学史学系・刊帛学文教基金会 籌備處 二〇〇三)、『同第二輯 第二屆簡帛学術討論

- 会論文集」(同 二〇〇四)『楚地簡帛思想研究 三』
 (丁四信主編 二〇〇七) などがある。
- (10) 池田知久著『馬王堆漢墓帛書五行篇研究』(始めに
 参照)
- (11) 金谷治『疑古の歴史』(金谷治中国思想論集下巻)
 (平川出版社 一九九七年) 所収) 参照
- (12) この問題については拙論「新出土資料の発見と疑古
 主義の行方」(『中国出土資料研究』第二号所収) 参照
- (13) 池田知久氏著『馬王堆出土文獻訳注叢書 老子』解
 説参照
- (14) 崔仁義著『郭店楚簡老子研究』(科学出版社 一九
 九八) 並びに拙論「郭店楚簡『老子』及び『太一生
 水』から見た今本『老子』の成立」(『楚地出土資料と
 中国古代文化』所収) 参照
- (15) これについては、郭静靈中山大学教授が、二〇〇七
 年八月三一日台湾大学哲学系主催「戰國楚簡文哲研
 會」において「簡・経(緇衣)校讎及政治思想的演變
 (一)」と題する報告を聴講する機会を得た。教授は現
 在このテーマで研究を進めており、近々その成果が刊
 行されるそうである。